

## ヘルプ

今、劇場では「ヘルプ」という映画が公開されています。この映画は、1960年代のアメリカミシシッピ州、ジャクソンという町が舞台となっており、原作はアメリカの人気作家キャスリン・ストケットが2009年に発表した同名の小説です。

主人公は、南部の上流階級に生まれた作家志望のスキーターという名の女性で、黒人のメイド達に囲まれて何不自由なく育ちます。大学を卒業して故郷に帰ってきた彼女は、白人社会の中で差別され、虐げられながら生活している黒人達をみて、疑問、憤りを感じ始めます。そして、黒人達の置かれている厳しい姿を本に纏め、世に伝えたいと思い立ちます。

スキーターは、黒人メイド達にインタビューしようとはしますが、初めは誰も口を閉ざすばかりです。何故なら、南部では、黒人が現状に対して批判的な行動を起こすことは命を失うかも知れない程危険なことだったからです。そんな中、1人のメイドがインタビューに応じたことをきっかけに、やがて多くの黒人メイドがインタビューに応じ、一冊の本ができあがります。出来上がった本は、白人社会にセンセーションを巻き起こしますが、同時に黒人メイド自身をも変えていく大きな力であったことが分かります。

映画の中では、子どもを病気から守るためと称して、黒人メイド専用の野外トイレを設置するシーンや、黒人メイドが嵐の日に、屋外の黒人専用トイレではなく室内のトイレを使ったことがばれ、首になるというシーンが出てきます。

アメリカの黒人達は、1862年9月、リンカーン大統領によって行われた「奴隷解放宣言」によって奴隷という立場からは解放されましたが、人種差別という頸木は1964年7月に「公民権法」が制定されるまで解かれることはありませんでした。

「ヘルプ」は、「分離すれども平等」というジム・クロウ法（一般公共施設の利用を禁止制限した法律を総称）の考え方や社会慣習に支配されていた当時の南部の様子を、見事に切り取って描いています。

映画の中では、バスの中で、白人達から冷たい視線を浴びながら身を小さく

して乗っている黒人達の姿が描かれています。既に公共交通機関での人種差別は違憲とされていたにもかかわらず、人の気持ちを変えることが如何に難しいかが良く分かります。

しかし、そうした中でも、勇気を持って声を上げる人が出てきます。それが、ローザ・パークスでありマーチン・ルーサー・キング牧師です。

1955年12月、ローザ・パークスは仕事を終えて帰宅するため市営バスに乗車したところ、黒人の座席が一杯だったので黒人も座れる中間の席に座ります。ところが、だんだん混み合ってきて白人の中にも立つ人が現れると、運転手が中間席に座っている黒人に立つよう命じます。座っていた黒人の何人かは席を空けますがローザは立たなかったため警察に逮捕されてしまいます。

ローザ逮捕の知らせが伝わると、キング牧師らは抗議運動に立ち上がり、そして遂に、1956年連邦最高裁判所から、公共交通機関における人種差別を違憲とする判決を引き出すに至ります。

キング牧師は、この運動の勝利を契機として、全米各地で非暴力を掲げて公民権運動を指導し、1963年8月にはワシントン大行進で25万人を集めた抗議集会を成功させるのですが、ここで行われたキング牧師の演説こそ、世界の人々に感銘を与えた「I Have a Dream (私には夢がある)」です。

「ヘルプ」の原作は、全米で1130万部を突破するというミリオンセラーとなりました。しかし考えてみると、アメリカの歴史の中での汚点ともいえるべき人種差別を取り上げた小説が、かくも多くのアメリカ人に読まれたのは何故でしょうか。

多分それは、差別というものは、人種間だけのものではなく、今以て性や、職業など様々なところに潜んでいるという現実があり、そのことへの抵抗として、一人ひとりには誠に微力だけれど勇気を持って一歩前に踏み出し、自由を勝ち取った女性達への共感ではないかと思います。「ヘルプ」の主人公達は、自分の意志で行動する人です。それが、社会を変える力になることを、この作品は訴えているように感じます。

キング牧師が提唱した「非暴力主義」は、無抵抗を意味するものではありません。彼は、現状を変革することに決して弱腰ではなく、行動の人でありました。

そのキング牧師は、今から44年前（1968年）の4月4日、テネシー州メンフィスにて凶弾に倒れます。享年39歳でした。（塾頭 吉田 洋一）